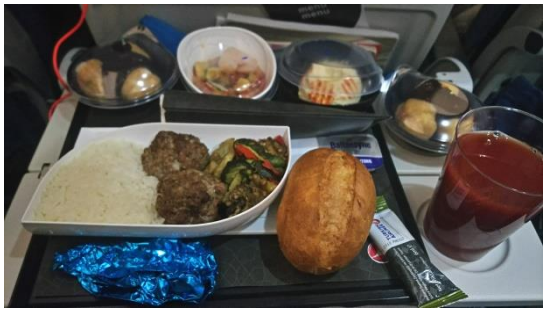
成田空港からイスタンブール空港へ　　2018年12月8日(土)

（文責:環境建設工学専攻　2年　板倉 あい）

冬季ウィーン研修に参加するため、私たち参加者は 19 時ごろ、成田空港に集合しました。これが私にとって初めての海外渡航でしたが、国内渡航で成田空港を何度か使ったことがあり行き慣れていたので、千葉駅周辺で買い物をしたり、カフェでゆっくり過ごした後で、早く空港に着きすぎないように時間を調整して、電車で成田空港へ向かいました。ところが、他の学生は空港内で両替をするなどの用事があったり、成田空港に行くのが初めてだったため早めに空港に着いており、私が最後の到着者でした。そのため、座席の指定を一人で行うことになり、イスタンブールまで話し相手のいないフライトを過ごすことになりました。昼間のフライトなら寂しいかもしれませんが、たまたま隣が空席だったので二席分を使って寝ることができ、まさに残り物の福でした。

21 時 25 分に私たちを乗せたトルコ航空機は成田空港を離陸しました。離陸後しばらくして夕食が提供されました。私は離陸から夕食の時間までは備え付けのモニタで映画を観ていたので、離陸後すぐに夕食の時間が来たように感じられました。メニューでは和食と洋食から選択できるとのことでしたが、私のところへ順番が回って来た時にはすでに和食が品切れでした。幸い、洋食の主菜のトルコ風ハンバーグが気になっていたので、不満はありませんでした。トルコ風ハンバーグは日本の一般的なハンバーグと変わらない味がしました。夕食が終わるとそろそろ日付が変わる時間帯になってきました。まもなく機内が消灯されましたが、私は映画を鑑賞してから寝ることにしました。今日はまだウィーンに着いてすらいないのに、乗務員との英語での会話が意外にも通じることや、トルコ風の料理は、見慣れない見た目の割に食べ慣れた味がすることには驚きました。ウィーンでの生活ではどのような新鮮な驚きが溢れているのか期待が高まりすぎて落ち着きませんでしたが、明日のイスタンブール空港での乗り継ぎに備えてしっかり睡眠をとることにしました。

成田空港での出発前の集合写真



機内での夕食

長かった「12月9日」　　2018年12月9日(日)

（文責：機械・電子システム工学専攻　2年　段野下　宙志）

今日は1日の大半を移動時間に費やしました。トルコ・イスタンブール経由でオーストリア・ウィーンに向かった私にとっては、「12月9日」は普段の1日より長かったです。長い旅程による疲れが私たちの1日を長く感じさせたのではなく、時差によるちょっとしたいたずらで12月9日が特別な日になりました。

12月8日の21時に日本を出発し、12時間のフライトを終え、12月9日午前3時のイスタンブールに到着しました。ここで、12時間のフライトを終えたにも関わらず、出発地と到着地の時計だけを見ると6時間しか経っていないように感じました。このときから、私の「12月9日」が始まりました。

乗り継ぎに伴う待ち時間のため、イスタンブール空港で6時間ほど待機したあと、現地時刻の午前9時半にイスタンブールを出発しました。ウィーンまで、1時間半ほどのフライトでした。そして目的地のウィーンに着いたのは現地時刻で午前10時頃です。ここでも、1時間半のフライトを終えたにも関わらず、30分ほどしか経っていないような気がしました。

以上のように、12時間のフライト (東京→イスタンブール) を終えてから、現地の時計を見ても6時間しか経っていないと思い、1時間半ほどのフライト (イスタンブール→ウィーン) を終えて、現地の時計を見ても30分しか経っていないと感じたのです。これが「12月9日」を長く感じさせた正体でした。

実は、東京→イスタンブールの際とイスタンブール→ウィーンの際に、食事を2回と1回それぞれの機内でいただきました。到着後はウィーン市内を電車で移動して、滞在するホテル周辺で昼食をとりました。ホテルでチェックインを終えて、夕方には次の日からお世話になる、イデアツ異文化・比較文化研究所のヨハンネス・メルク先生にお会いしました。その後ウィーン市街を少し散歩し、ウィーンの街の風情を堪能し、夕食を取って、1日を終えました。1回目の機内食が「12月8日」の分だとしても、それでも今日「12月9日」には、私は4回食事をしているのです。どうりで良く眠れるわけです。さて、明日からの授業がとても楽しみです。

ウィーンの街の夜景の1ショット (ウィーン市庁舎前のクリスマスマーケット)

ウィーンでの初めてのドイツ語の授業　　2018年12月10日(月)

（文責：環境建設工学専攻　1年　三森　彩音）

今日はウィーンで初めて迎える朝です。私は朝6時に起床しましたが、窓の外をみるとまだ暗かったです。身支度の後にホテルで朝食を食べました。ホテルの朝食はバイキング形式で、シリアルや生野菜、チーズやハム、パンなどが複数ありました。特に私が嬉しく思ったことは、ジャムや調味料の種類がたくさんあったことです。

朝食後、メルク先生が10時にホテルに迎えに来てくださいました。授業初日のため一緒に電車や路面電車に乗り、イデアツ・インスティトゥートに行きました。ホテルから少し歩いてから、シュタットハレ駅から電車に乗り、アルザーシュトラーセ駅で降り、さらに路面電車に乗り換えました。授業では、これから使用する、ドイツ語のテキストが配られました。その後、私たちが事前に送付していた自己紹介文を発表し、ドイツ語を直してもらいました。また同じドイツ語であっても、ドイツとオーストリアでは異なる単語を使うことがあることを教えていただきました。語彙や文法のみならず、文化についても学ぶことが多くありました。

昼休みには、イデアツ・インスティトゥートの近くのスーパーマーケットに昼食を買いに行きました。私が買ったパンは2つで合計約0.9ユーロ(1ユーロは約130円)と非常に安い値段でした。日本ではほとんど見かけない形のパンなどいろいろな種類のものがありました。私はクロワッサンとプレッツェルを買いました。食べてみた感想ですが、プレッツェルには塩味をほどよく感じ、クロワッサンもどちらもとても美味しかったです。また、スーパーマーケットの買い物かごは日本と異なり、日本と比べて幅が狭く高さは高く、底に車輪がついていて、かごを持ち上げずに引いて歩きました。そのほか会計のシステムも日本と異なりました。日本では買う商品の入ったかごをレジに置いて会計しますが、ウィーンのスーパーマーケットではレジのベルトコンベアーに商品を流して会計しました。また、レジ袋は有料のためエコバッグを持参しました。

本日はウィーンに着いてから初めてのドイツ語の授業を受け、初めてスーパーマーケットを利用しましたが、すでに普段の自分の生活と異なることを多く体験しました。これからの滞在も楽しみになりました。

クロワッサンとプレッツェル

授業風景

天候に恵まれなかったシュテファン大聖堂のクリスマスマーケット訪問　2018年12月11日(火)

（文責：情報工学科　5年　山﨑　凌輔）

今日は朝6時に目が覚めました。ウィーンはまだ暗く、うっすらと光る街灯と深夜の雨で湿った地面が寒さを際立たせていました。柴田先生は、大混雑であるブリューゲル展の予約券を購入するため、朝早くから美術史美術館へ向かわれたため、今日は初めて私たち学生だけでイデアツ・インスティトゥートまで向かわなくてはなりませんでした。まだ慣れないイデアツ・インスティトゥートまでの道のりを思い出しながら、9時に到着しました。今日の授業の内容は、昨日の宿題の解説と、明日までに調べてくる課題の導入、オーストリアの近代史の概説とその時代に活躍した偉人たちについてでした。

昨日の宿題は、4格の目的語を取る動詞を使った文章を5つ作るというものでした。昨日習った単語や覚えたての単語を積極的に用いて文章を作った学生が多くいました。そのため、解説の途中で昨日の復習ができ、新しい単語を多く学ぶことができました。また、明日までの宿題として、3人ずつ2つのグループに分かれて、ウィーン出身の世界的に有名なシンガーであるFalcoと、第二次世界大戦直後のオーストリアの状況を描いた映画『第三の男』について調べてくるという課題が与えられました。どちらも興味深いテーマでした。オーストリアの歴史の授業では、第一次世界大戦後のオーストリアの状況と第二次世界大戦におけるオーストリア併合までのおおまかな流れと、オーストリアの偉人マリア・テレージア（1717-1780）とヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）について学びました。私はオーストリアの歴史についてこれまであまり詳しく知らなかったので、授業はとても興味深く、オーストリアについてもっと学びたいと思いました。

15 時に授業が終わり、遊園地プラーターとシュテファン大聖堂前のクリスマスマーケットに向かいました。しかしこの日は天候に恵まれず、雨と時折吹く強い寒い風のため満足に行動することができませんでした。魅入ってしまうほど美しいゴシック様式のシュテファン大聖堂とその周りの建築物の雰囲気や、その雰囲気を決して崩さないようなデザインのシュテファン大聖堂周辺のクリスマスマーケットの屋台は、他のクリスマスマーケットとはまた異色のクリスマスマーケットだったので、じっくり楽しむことができなかったのはとても残念です。次回また訪れることができれば、その時はじっくり楽しみたいです。

悪天候だったシュテファン大聖堂

プラーター遊園地の大観覧車

はじめまして、Hannah！　　2018 年 12 月 12 日(水)

（文責:環境都市工学科　5年　岩本　和音）

今日は、午前 9 時から午後 4 時までメルク先生のドイツ語の授業を受けた後、夕方から、マリア・テレジア広場にあるクリスマスマーケットを訪れました。

今日のドイツ語の授業では、オーストリアの伝統的な料理やお菓子の名前、レストランでよく目にする単語、飲食店でのチップの常識、公共交通機関の種類などについて学びました。また、昼食はトルコ料理店でケバブのサンドウィッチを食べました。とても食べ応えがあり、満足することができました。

昼食後には、メルク先生の娘の Hannah ちゃん(10 歳)が教室まで遊びに来てくれ、自己紹介を交えながらオーストリアの小学校に関する知識を教えてくれました。オーストリアでは主要科目は 3 教科（英語、数学、ドイツ語）であり日本の 5 教科と異なること、その他の補助科目の内容の説明、クラスメイトに移民の背景をもつ子が多くいることなどを知ることができました。現在大きな政治問題となっている難民や移民の受け入れが、オーストリアの多文化社会を築き上げていることがわかりました。

授業後は、数あるウィーンのクリスマスマーケットの中でも特に有名なマリア・テレジア広場のクリスマスマーケットを訪れました。広場の中心にはハプスブルク家の女帝であり、あの有名なマリーアントワネットの母親でもあったマリア・テレジアの大きな像がありました。広場を囲むように、来週訪れる予定の美術史博物館がありました。ここでは現在ブリューゲル展が開催されています。クリスマスマーケットではココアを飲んだり、それぞれが気に入った商品を購入したりしました。僕はオーストリア発祥であるスノードームを購入することができ、とても満足しました。

昼食で食べたケバブ・サンドウィッチ

クリスマスマーケットでのみんなの様子

カールスプラッツのクリスマスマーケット　2018年12月13日(木)

（文責：電気電子工学科　4年　齋藤　望結）

今日もいつものように、9時からイデアツ・インスティトゥートで授業が始まりました。今日の授業では、はじめに昨日の宿題だった「地元の交通機関への提案や要望を市長に伝えるメール」をメルク先生に添削していただきました。次に、オーストリアの宗教、祝日について学びました。オーストリアには、約70％のカトリックの他、プロテスタント、ユダヤ教、イスラム教、などさまざまな宗教の人がいます。オーストリアの多くの祝日は、カトリックの記念日にちなんでいます。教会で結婚式やお葬式などの儀式を行うためには、教会税を払わなければいけないと伺いました。このように、今日の授業のテーマは「文化の違いについて」でした。

私が今日の授業で一番面白いと思ったのは、ウィーンでは日本とは異なり、公共交通が全て公営で、運賃が安い点です。また、驚いたことは、企業が、雇用者の人数に合わせて公共交通機関に関する税を納めていることです。日本も、バスなどの値段が高いので、全部公営になって安くなれば嬉しいと思いました。

１5時に授業が終わった後、私たちは、電車に乗ってカールスプラッツに行きました。カールスプラッツ駅の旧駅舎は、1898年～1918年に建築家のオットー・ヴァーグナー(1841~1918)が設計し建築されたそうです。そのデザインは、アール・ヌーヴォー様式で、ウィーン世紀末を象徴する建物でとても洒落ていると感じました。

カールスプラッツ駅の周辺には、リンクシュトラーセギャラリーという大きなショッピングモールやカールス教会があり、教会の前の広場ではクリスマスマーケットも催されていました。町全体にイルミネーションが輝いており、とても綺麗でした。クリスマスマーケットでは、手作りのかわいい小物が売っていたり、自転車をこいで回すメリーゴーランドなどの屋台がありました。私はErdäpfelpufferというじゃがいもを薄く伸ばして揚げたものを食べました。サクサクしていてしょっぱくて美味しかったです。

帰り道には、泊まっているホテルの近くのイタリアンレストランに寄り、ピザを食べました。みんな疲れていた様子でしたが、楽しく、またおいしく食べることができました。

今日は、オーストリアの文化について学び、またクリスマスマーケットを楽しむことができ、充実した一日でした。

カールスプラッツのクリスマスマーケットにて

カールス教会

Erdäpfelpufferを食べる齋藤

ウィーン中心街逍遥

2018年12月14日(金)

（文責：環境建設工学専攻　2年　板倉 あい）

ウィーンでの私たちの活動は天候に恵まれないことが多いです。しかし、「家族へのポストカードをウィーンから送る」という昨日のドイツ語の宿題では、みんながウィーンの街並みの素晴らしさを語っていました。他にも、ウィーンでの食べ物のおいしさや家族へのお土産の話などが手紙での話題に挙げられていました。私はメルク先生から、例えば「美味しい」という単語は、ドイツでは”lecker”と言い、オーストリアでは”schmeckt gut”と言ったり、「さようなら」という単語はドイツでは”Auf Wiedersehen”と言い、オーストリアでは”Auf Wiederschauen” と言うことが一般的であることを学びました。今日はまた、メルク先生から、日本とオーストリアの違いについての興味深い話も聞きました。それは、「お土産買って帰るよ」と家族や友達に言うのは、非常に日本的な習慣で、ドイツやオーストリアではお土産のことを明言しないそうです。日本ではお土産について話すことが割と多いので、私がお土産をあげる側ならば事前にお土産について聞いていないと、好みに合わないお土産を買ってしまいそうで少し不安だと感じました。

本日の授業は12時30分に終わり、メルク先生を含めた全員でウィーン大学の学生食堂に行って昼食をとりました。ウィーンに来てから米料理を見ていませんでしたが、学生食堂では米を使った料理が多くありました。私は米の上にチリソースがのった野菜チリという料理を食べました。私がよく小中学校の給食で食べていたチリコンカーンとよく似た味がしました。デザートにキャロットケーキを頼んだこともあり、会計では7ユーロ支払いました。味はとても良かったですが、ウィーン中心部ということもあり学生食堂でも食事の価格が割高でした。昼食後、大学の本館で、壁の一角にウィーン大学の歴代の学長の名前の一覧を見つけました。最初の学長の着任は1365年でした。ウィーン大学は途方もなく長い歴史のある大学でした。

その後、ウィーン大学敷地内のクリスマスマーケットで体が温まる飲み物を飲み、私たちはメルク先生と別れてウィーン中心部に向かいました。ユリウス・マインルという高級デパートで買い物をした後、しばらく散策して中心街の景色を楽しんでからチロラーホーフというカフェに行きました。私はパラートシンケンというクレープにクリームとチョコレートソースを添えたスイーツを頼みました。それは私には甘過ぎたので、他の甘い物好きのメンバーに食べてもらいました。カフェを出た後、18時に再度メルク先生と合流し、市庁舎のクリスマスマーケットに行きました。メルク先生の大学のクラスにいるという二人の女性も同行しました。二人の女性のうち、ザンドラというスロベニア出身の女性とはとても仲良くなりました。

その後、20時30分からシュテファン大聖堂でアドベント・コンサートを聴きました。美しい音色で、80分が一瞬で過ぎ去りました。本当に素晴らしい聖堂の中で素晴らしい音楽を聴けたので、もっと前の席で演奏風景を見られなかったのが少し残念でしたが、いつかまた次に来る時の楽しみに取っておくことにします。

ウィーン大学前での集合写真

パラートシンケン

シュテファン大聖堂の内部

白く染まったウィーンの町とシェーンブルン宮殿の歴史　2018年12月15日(土)

（文責：機械・電子システム工学専攻　2年　段野下　宙志）

昨夜から雪が降り、今朝のウィーンの町は白く染まりました。気温も低く、関東地方で育った私にとっては、氷点下の寒さはとても身に堪えました。しかし、そんな関東地方と大きく異なるのは、鉄道やバスなどの公共交通機関が雪に対して強いという点です。電車やバスは平常通り運行していました。雪の降る今日、そんな悪天候に負けない電車に乗って、私たちはシェーンブルン宮殿を訪れました。

シェーンブルン宮殿は、ヨーロッパでも有数のバロック建築の宮殿として知られています。シェーンブルン宮殿といえば、必ずキーワードとなるのが「ハプスブルク家」です。また、この宮殿は、1996年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。悪天候にも関わらず、多くの観光客が訪れており、チケットを買ってから入場までに3時間待ちました。そんな世界中の国々から来る観光客に対応するために、さまざまな言語での音声ガイドが用意されており、日本語の音声ガイドもありました。私がその音声ガイドを聴いて、この宮殿の歴史において重要な人物だとわかったのは、「マリア・テレジア女帝 (1717–1780)」と「フランツ・ヨーゼフ皇帝 (1830–1916)」と“シシィ”の愛称で知られる「エリザベート皇妃 (1837–1898)」です。

この宮殿は1569年にハプスブルク家のものでした。現在見られる形に改装されたのはマリア・テレジアの時代でした (改装期間: 1743～48年ごろ)。冬の主皇宮として使われていたホーフブルク宮殿とは異なり、夏の離宮として使われたこのシェーンブルン宮殿を、マリア・テレジアは、開放的で家庭的な宮殿になるように造営しました。生涯を通じて国の繁栄に尽力した彼女の人生は、決して平坦な道ではなく、壮絶なものでしたが、常に彼女の心には夫や16人の子供たちに対しての愛情に満ちていました。

もう1人の重要な人物、フランツ・ヨーゼフ1世は1830年にこのシェーンブルン宮殿で生まれて、1916年にシェーンブルン宮殿で亡くなりました。「最後の皇帝」として知られるフランツ・ヨーゼフは、17歳と若くして結婚し、妻であるエリザベート皇妃を生涯心から愛していたそうです。一方のエリザベート皇妃は、16歳にしてオーストリア皇后となり、皇室の厳格なしきたりを嫌悪していて、政略的な結婚に対しては後悔の念があったそうです。

シェーンブルン宮殿には1441の部屋があり、そのうち45室が見学コースとして一般公開されています。それらの部屋では、博物館のように歴史が物語られているだけでなく、ハプスブルク家の人たちの、オーストリアだけでなく家族に対しての愛を感じることができました。君主制に関して私は賛否を唱えることはできませんが、常に国のことを考えた彼らのことを尊敬し、私も家族を想う気持ちを忘れずにいたいものです。

雪に染まるシェーンブルン宮殿前での集合写真

ウィーンの自然と芸術を堪能

2018年12月16日(日)

（文責：環境建設工学専攻　1年　三森　彩音）

今日は晴れていましたが寒く、残雪に反射した太陽の光が眩しかったです。私たちは朝、電車とバスを乗り継いでウィーンの郊外にあるカーレンベルクという山に向かいました。山の上から景色を見ると、ドナウ川やウィーンの美しい街並みを展望できました。山にはバスで登り、その後長い道のりを歩いて下山しました。枝木にかかる雪や遠くにみえる街並みがきれいでした。下山途中の道沿いにはいくつもの広いぶどう畑があり、ぶどうの木が規則正しく植えられていました。

その後ハイリゲンシュタットに行き、ベートーベンがかつて住んだ家で現在はレストランになっている店で軽食や飲み物などをいただきました。私たちはカイザーシュマーレンを注文しましたが、これはオーストリア・ハンガリー帝国時代からある伝統的なデザートです。ウィーンでいくつか食べたデザートの中でも、私のお気に入りの1つとなりました。

その後ベートーベン博物館に行きました。ここもウィーンでベートーベンが住んだ家の1つです。6つの展示室にはそれぞれテーマがあり、ベートーベンゆかりの品物をみることができます。ある部屋には、そのベートーベンの家周辺の手書きの地図がありました。その地図は加工されていて、ベートーベンが住んだ場所に扉が付けられており、ベートーベンが住んだ家の写真を見ることができます。地図の中でも扉を開ける場所が5つあり、ベートーベンがハイリゲンシュタットで最低4回は引っ越したことがわかります。また別の部屋には、難聴のベートーベンが使っていた工夫に富んだ機械もありました。骨伝導で音を聴くことや、ヘッドホンを使って難聴を体験することができました。また、最後に見た部屋には高さが1m以上のベートーベンの胸像や1827年3月に埋葬されたお墓の鍵、髪の毛なども展示されていました。ベートーベンのお墓のある中央墓地へは明日行くことになっています。すべての部屋を観た後にチケット売り場に戻りました。そこには博物館を訪れた人が感想を書くことのできるノートがあり、日本人の書きこみが多くあることから、博物館に多くの日本人が来ていることが伺えました。

今日は美しい景色をみたり、有名な音楽家について知ったりと、ウィーンの自然と芸術を堪能できました。

カーレンベルク山にて

カイザーシュマーレン

ウィーン国連都市訪問と国立オペラ座でのオペラ鑑賞　2018年12月17日(月)

（文責：情報工学科　5年　山﨑　凌輔）

今日は、ホテルのロビーでメルク先生と10時に待ち合わせをして、国連都市に向かいました。国際連合の主要機関は世界4都市にあり、それはニューヨーク本部、スイスのジュネーブ、ここウィーン、ケニアのナイロビです。ウィーンには国際原子力機構があり、そこでは、世界の核問題について取り扱われています。他にも、宇宙の平和的な利用についての議論が行われています。今日私たちは、実際に議論が行われている会議場を窓ガラス越しから見学させていただきました。生の声を聞くことはできませんでしたが、テレビのニュースで見るような会議の様子を目の前で見ることができ、その光景は現実のものなのだと実感しました。

国連都市見学後、メルク先生と別れ、私たちはウィーン中央墓地へ向かいました。ここには一般の方のお墓のほか、ブラームスやベートーベン、ヨハン・シュトラウス、ファルコなどの名だたる有名人のお墓もあります。墓といえば日本では、たいてい直方体の墓石を思い浮かべますが、私が見たこの墓地のお墓はどれも違う形、色をしていました。墓一つを見ても、日本とオーストリアとの文化には大きな違いがあることを感じました。

夜は柴田先生が以前から予約していたオペラ「ヘンゼルとグレーテル」を国立オペラ座で鑑賞しました。オペラ座の外観は、日本の国会議事堂を彷彿とさせる石造りの建物で、軽く開いた入口の扉から中の光が差し込んでいました。オペラ座の中には、天井には大きなシャンデリアが吊り下がっていたり、シャンパンを飲んでいる正装の紳士淑女が何やら語り合っていたり、非常に高貴なオペラのイメージそのものでした。私たちの席はホールの最上階で、舞台に向かって右側に位置し、楽団と舞台の全てを見ることができませんでしたが、安い席なので文句は言っていられません。席の前には液晶端末があり、現在の演者が歌っている歌詞が、ドイツ語、英語、フランス語、日本語などから選んで見ることができ、ドイツ語に大きな不安がある私たちにも嬉しいデザインでした。開演してから閉演するまで、本当にあっという間でした。終始、素晴らしい音楽と演技が舞台を華やかなものにしましたが、私にとって特に印象的だったのは、魔女に魔法をかけられたヘンゼルと魔女の怪演ぶりと、その時の二人の演技が完璧にマッチしていた第三幕のシーンです。私は今日までオペラに全く興味がありませんでしたが、美しくきらめくオペラの世界をこれからもっと見てみたいと思いました。今日訪れた場所は興味深いところばかりで、学ぶことが多い一日でした。

国連都市の中庭

国立オペラ座のホール

クリムトの名画 ”Der Kuss“　　2018年12月18日(火)

（文責:環境都市工学科　5年　岩本　和音）

今日は、午前 9 時から 13 時までメルク先生のドイツ語の授業を受けた後、クリムトの「接吻」が展示されていることで有名なベルヴェデーレ宮殿に行き、多くの絵画作品を鑑賞しました。その後みんなでナッシュマルクトへ行き、夕飯を食べました。

今日のドイツ語の授業では、金曜日に出された課題をメルク先生が 1 人ずつ添削をしてくれました。課題のテーマは「週末にしたこと」であり、週末に何をしたかについて 100 語程度で書きました。参加者のドイツ語の文章にはそれぞれ違いがあり、僕にとってとても興味深かったです。私の書いた文章には、ドイツ語の文法の間違いが結構あり、先生が正しい文章に添削してくださり、とても勉強になりました。

授業後は、ウィーンで人気の観光地であるベルヴェデーレ宮殿の上宮を訪れました。この宮殿は、オーストリア・バロック建築の巨匠ヒルデブラントが建設した美しい宮殿です。当時ウィーンで多大な権力を誇っていたプリンツ・オイゲン・フォン・サヴァイ公が 1716 年に下宮を、1723 年に上宮を建設しました。オイゲン公亡き後はハプスブルク家が館を買い取り 19 世紀末からは王位継承者のフランツ・フェルディナントが暗殺？されるまでこの宮殿に住んでいたそうです。現在この宮殿は美術館になっており、上宮にはグスタフ・クリムトの「接吻」、エゴン・シーレの「死と乙女」などが展示されています。その他にもオスカー・ココシュカやリヒャルト・ゲスルトらの作品があります。名画であるクリムトの「接吻」や「ユディト I 」をこの目で見ることができたのは、とても素晴らしい体験でした。以前絵画について少し学んだことがある僕にとって、とても有意義な時間でした。

絵画を鑑賞した後は、ベルヴェデーレ宮殿の裏にあるクリスマスマーケットを訪れ、軽食の Würstel（ソーセージ）をみんなで食べました。私はザッハーヴルストという名前の、ウィーンのソーセージを食べました。細長くて肉汁があまりなく、これまで食べた他のソーセージとはまた異なり、美味しかったです。

その後18時ごろに今滞在2回目のナッシュマルクトを訪れました。そこで、それぞれの夕食やお土産などを購入し、とても満足することができました。

写真１：クリムトの名画「Der Kuss」

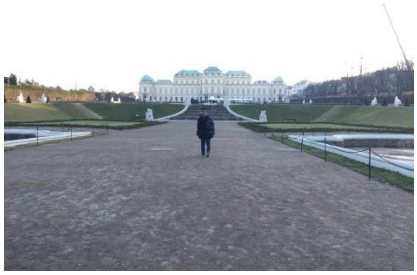


写真２：ベルヴェデーレ宮殿の上宮

ウィーンの芸術と名物料理シュニッツェル　　2018年12月19日(水)

（文責：電気電子工学科　4年　齋藤　望結）

今日も、いつものように9時から授業が始まりました。今日の授業では、まず最初に、昨日の宿題であった「自分が環境に対して日々取り組んでいること」を30語で書くという課題を添削していただきました。私は、節電や節水について書きました。次に、今日の午後に訪問予定の芸術家のフンデルトヴァッサー(1928~2000)と、カール・マルクス・ホーフという労働者向け集合住宅について教えていただきました。

フンデルトヴァッサーは、オーストリアを代表する芸術家で建築家でもありました。彼のデザインには、直線は用いられず、カラフルで、とても斬新です。ウィーンには彼の代表作であるごみ焼却場とフンデルトヴァッサーハウスがあります。そしてまた、日本の大阪にも彼がデザインしたごみ焼却場があるそうです。

カール・マルクス・ホーフは1930年に完成した、当時、劣悪な住宅に住んでいた労働者のための集合住宅です。第一次世界大戦の敗戦でハプスブルグ帝国が崩壊し、その後、表面化した労働者の貧困、社会問題を改善するためにこの住宅は建てられました。住宅中には、病院や幼稚園などもありました。現在でも、ここに暮らす人の家賃は安いそうです。

授業が12時に終わったのち、電車でまずSpittelauにあるフンデルトヴァッサーが作ったごみ焼却場へ行きました。すごくカラフルで、とてもごみ焼却場とは思えないポップなデザインでした。次にハイリゲンシュタットにある、カール・マルクス・ホーフへ行きました。駅から降りると、すぐ目の前にその赤い建物が目に入りました。カール・マルクス・ホーフは全長が約1,2kmもあり、とてもインパクトがありました。

その後、フンデルトヴァッサーハウスとフンデルトヴァッサーの美術館であるクンストハウスに行きました。彼の絵には、「百水」と漢字の印が押されたものもあり、面白いなと思いました。また、その作品はカラフルで曲がった線ばかりだったので、私は見ていて楽しい気持ちになりました。

見学後、美術館のカフェに寄り、少し休憩してから有名なシュニッツェルのレストランのフィグルミュラーへ行きました。お店の前には、行列ができていたのですが、私たちはメルク先生が予約してくれていたので、すぐに入ることができました。シュニッツェルは、トンカツのようにお肉に衣をつけて油で揚げたものなのですが、肉厚でなく薄くてサクサクしていました。大きさは30㎝ほどもあり、とても大きかったのですが、おいしくてみんなぺろりと完食していました。

今日は、ウィーンの芸術に触れ、おいしいものを食べることができ、とても満足な一日でした。

フンデルトヴァッサーハウス

フィグルミュラーのヴィーナーシュニッツェル

一生に一度のブリューゲル特別展　　2018年12月20日(木)

（文責：環境建設工学専攻　2年　板倉 あい）

今日私たちが訪れたブリューゲル特別展は、本当に特別な展覧会でした。ブリューゲルの絵画は傷みやすいため、貸出が困難なことが知られています。しかしながら、今回のブリューゲル特別展では、世界各国の美術館から18点ものブリューゲルの絵画が、ここ、ウィーンの美術史美術館に集められたのです。

今朝、私たちは予約券で指定されていた9時10～30分に入館できるように、8時半にホテルを出発しました。道中、雪が降っていましたが、美術史美術館の開館時間は9時なので、ひと気のない美術館で思う存分ブリューゲルを楽しめるだろうという期待感や、一緒に特別展に行ったメルク先生の話の面白さもあってか、寒さを気にせずに美術史美術館に到着しました。

今回のブリューゲル特別展では、現存するブリューゲルの絵画の内、実に4分の3を占める合計30点の絵画が展示され、これほど大規模なブリューゲルの展覧会は今後2度とないだろう、と言われています。ブリューゲルは「バベルの塔」が特に有名ですが、彼は当時、初めて冬の景色を大々的に描いた画家と言われているそうです。また「雪中の狩人」からは、雪に残された足跡の質感が感じられ、青緑色に凍てついた空の描写が真に迫り、冬の厳しい寒さが伝わってきました。また、ブリューゲルは存命当時、絵画のディテールの細かさや、絵画に込められたメッセージの隠し方が巧みなことを評価されたそうです。確かにそれらの描写は極めて優れていて、オーディオガイドでの解説を聞きながら、何度もはっとさせられました。

ブリューゲル展を楽しんだ後、私たちは館内のカフェで休憩しました。私はゼリーで固めたベリーがのせられたケーキとモーツァルト・コーヒーというコーヒーを注文しました。ケーキは甘すぎず、とても私好みの味がして、コーヒーとも相性抜群でした。カフェのメニューには他にもクリムト・トルテやモーツァルト・トルテなどのケーキがあり、ウィーンらしい名前の付いたラインナップとなっていました。

その後、イデアツ・インスティトゥートに行き、昨日のドイツ語の作文課題の添削をメルク先生から受けました。課題のテーマは、「ウィーンで新しく発見した興味深いもの」について書く、というものでした。授業の終わりに、私たちは感謝の気持ちを寄せ書きしたメッセージカードと日本からのお土産をメルク先生に渡しました。もうメルク先生の面白い話を聞けなくなると思うと名残惜しかったです。私たちは、メルク先生から修了証とウィーンでよく知られたマンナーのチョコレート菓子を受け取りました。

その後、私たちはウィーンの中心部に買い物に出かけ、ひそかに気になっていた様ざまな人気店を回りました。文房具店では、ボールペンの種類がとても豊富でした。最後にホテル・ザッハーに行き、ウィーン名物として有名なザッハートルテをお土産用に買いました。今日は

最高の絵画展に行けたうえ、お土産も手に入れられたので、明日は満足してウィーンを出発できそうです。

雪に埋もれる美術史美術館

モーツァルト・トルテとモーツァルト・コーヒー

ウィーン滞在最後の日
―ホーフブルクを訪れて―

2018年12月21日(金)

（文責：機械・電子システム工学専攻　2年　段野下　宙志）

今日は、いよいよウィーン滞在最終日です。ウィーン空港を出発する19時の便に乗るため、夕方まで時間がありました。最後の滞在日である今日、日中に私たちはホーフブルク宮殿を訪れました。ここでは、ホーフブルクを訪れた感想と、このウィーンでの研修最終日に感じた私個人の所感を記します。

ホーフブルク宮殿はウィーンの中心に位置しており、かつてはハプスブルク家の居城でした。現在は、博物館や国立図書館、大統領官邸として使用されています。この日、私たちは博物館を訪れました。博物館には、音声ガイドが用意されており、説明を聴きながら展示物を見ることができました。

銀器コレクションには、王宮で実際に使われていた食器が数多く展示されていました。華やかで美しいものがたくさんありましたが、中には複雑な形状をした食器もありました。率直な感想としては、「これ、使いやすいのかな」と思うものも少なくありませんでした。しかし、機能性だけでなく外見の美しさもかなり重要視されていたことが伺えました。銀器コレクションの部屋を過ぎると階段があります。この階段は皇帝フランツ・ヨーゼフ1世も使用していた「皇帝の階段」です。これを昇るといよいよシシィ博物館です（皇帝フランツとその皇后シシィについては12月15日の報告書を参照）。

シェーンブルン宮殿を訪れて（12月15日訪問）から、すっかりシシィの魅力に惹かれた私にとって、この階段を昇るとき、とても気分が高揚したのを覚えています。展示室は、どの部屋も少し薄暗く、そこにシシィゆかりのものが多く展示されており、彼女の激動の一生をなぞるように足を進めていきました。皇室の諚やしきたりに逆らい、生きづらさを感じながらも生きていた彼女の物語の壮絶さを知り、身分や世俗などがある人の人生におよぼした影響が、いかに重要で深刻なものかを実感しました。

皇帝の部屋では、皇帝の居室や書斎だけでなく、シシィの部屋も展示されていました。当時の彼らの生活の様子が想像できるように部屋が再現されていました。フランツ・ヨーゼフ1世とシシィと、2人の生活がどのようなものだったのかを想像することができました。私の感想としては、2人とも、生活が「ストイック」だと感じました。皇帝は、早朝に起きて祈りを捧げることを毎日欠かさず、謁見にも積極的に応じ、事務仕事にも手を抜かなかったようです。シシィはそのプロポーションを保つための努力を決して欠かさず、美しさに磨きをかけるための時間を惜しまなかったそうです。私は人々の上に立つような皇族は悠々自適な生活を送っているものだと勘違いしていました。行政を担う者としての自覚、国民の上に立つものとしての自覚などが展示から伝わってきました。

さて、今回のウィーンの研修もほとんど終わろうとしています。私は今までにドイツに3度訪れたことがありますが、オーストリアを訪れるのは初めてでした。少なからず、両国の文化に差を感じるところがありました。そして、もちろん両国の文化の違いを少しでも体験できたのも大変良い経験になりましたが、ドイツ語を使う舞台は必ずしもドイツだけではないのだ、ということを実感できたことは何よりも嬉しかったです。これまで、本科の3年次から学習してきた甲斐あってか（現在専攻科2年）、ドイツ語力の向上に伴って、得られる情報量も増えてきました。上述したような歴史的な情報もその1つです。これは私の視野が広がったことを意味していると思っています。何よりも嬉しいことです。このように今回得られたことを胸に、帰国の途につきます。

ホーフブルク宮殿の前で

「皇帝の階段」：ここを登るとシシィ博物館の入り口があります。

日本への道のり －ウィーン研修最終日－　2018年12月22日(土)

（文責：環境建設工学専攻　1年　三森　彩音）

私たちは、ウィーンからイスタンブールに向かう飛行機内で研修最終日を迎えました。帰路は、予定では、19:15ウィーン発、23:35 イスタンブール着、約2時間のトランジットの後、2：00イスタンブール発、19:40成田着となっていました(時刻はすべて現地時間)。しかし、ウィーン空港からの出発時刻が予定よりも2時間以上遅れてしまいました。飛行機がイスタンブール空港に着陸した後、私たちを含む飛行機の乗客はバスで空港内の建物に移動しましたが、乗換時間がほとんど無かったため、成田空港行きの飛行機のゲートまで走って急いで向かいました。まるで高専で12月18日（火曜日）に行われたマラソン大会のようでした。私たちが最後の乗客でしたが、飛行機内に搭乗して水をもらいやっと落ち着くことができました。

しかし、成田空港到着後もハプニングがありました。私を含む学生4人の預け荷物が成田空港に到着していなかったのです。そのため私たちが利用した航空会社であるターキッシュエアラインズの方に呼ばれ、荷物を配送してもらう手続きをしました。私は海外に行ったのは初めてで、国内で飛行機に乗ったのも2往復だけと少なかったため、このような手続きは初めてでした。自分のパスポートと荷物の半券付きの航空券の半券を窓口で見せ、そこで渡された書類に受取先の住所や連絡先を書き込みました。その後預けた荷物の外観や中身の質問に答え、荷物の鍵を窓口に預けました。一度荷物を開けてから検査に回すとの説明をうけ、お詫び文と問い合わせ先の書かれた紙を受け取りました。私は預けたスーツケースに荷物をぎゅうぎゅうに詰めてしまったため、開けた後再び閉めることができるのか、荷物が無事に届くのか心配になりました。

手続き後、税関を通り集合写真を撮った後、解散となりました。私は空港まで車で迎えに来てくれた父母と家路につきました。父母は、私の預け入れ荷物が届かなかったことにとても驚いていました。

長く密度の濃い2週間の海外研修の最後をこのように慌ただしく迎えましたが、ウィーンで学んだことをいかせるよう今後ともドイツ語学習を頑張ります。

成田空港にて集合写真

2回目の機内食